

第 60 回大会準備状況

教育史学会第60回大会は、2016年10月1日（土）・2日（日）の日程で横浜国立大学で開催されます。60周年記念事業の一環として国際シンポジウムが企画され、大会準備委員会での議論を経て、以下のようなテーマが設定されました。

テーマ：教育史研究の新たな船出

—教育史研究はどこに向かうべきか—

日 時：2016年10月1日（土）14：00～17：45

場 所：横浜国立大学教育文化ホール

報告者：リチャード・ルビンジャー

（インディアナ大学）

韓 龍震（高麗大学校）

辻本 雅史（国立台湾大学）

指定討論者：

越水 雄二（同志社大学）

司 会：一見真理子（国立教育政策研究所）

大戸 安弘（横浜国立大学）

《趣旨》

国際シンポジウムも3回目となる。これまでの教育史研究の歩みを振り返りつつ、流動性が進み行く21世紀前期社会の現実を視野に入れ、今後の教育史研究の新たな可能性について、その道筋を確認することとしたい。

この国で教育史学は19世紀後期に教職のための学問領域として出発したが、その後はそれぞれの時代状況に直面しながら近代的ディシプリンとしてのたしかな位置を求めての歩みが続いた。1930年代にはそれまでの個別の大学を単位とする閉鎖性を越えた組織的な活動の場として日本教育史懇談会が発足し、40年代に教育学関連では初の学会となる日本教育史学会へと転じた。さらに東洋教育史学会、西洋教育史研究会も続いた。やがてこれら三つの組織は個々の活動を継続しつつも、相互交流の組織として一体化し、1956年に教育史学会が創設されるに至ったのであるが、その意図は、日本・東洋・西洋といった境界を横断した視野の広がりを持った新たな教育

史像の構築といった点にあった。しかし、こうした学会創設の原点への意識は、創設から20年ほど経過した70年代には薄れつつあったようだ。会員数の増加に伴う蓄積もあって研究の専門分化が進行したからである。このことは現在に至るまで克服すべき問題として屢々指摘されている。

学会としてのあり方が曲がり角を迎えていたこの時期に、『20周年記念誌』（1977年）が刊行されているのだが、同誌で「教育史研究の動向」を執筆した入江宏は、その冒頭で教育史学の草創期を切開いてきた先駆者としての石川謙（1891-69）について述べている。石川は、『石門心学史の研究』（1939年）で戦前に、『古往来についての研究』（1950年）により戦後にと二度学士院賞を受賞しているが、こうした一連の業績によって教育史研究は日本アカデミズムにおける市民権を獲得し得たとしている。

こうした石川の生涯や研究歴を多少なりとも紐解いてみると、そのユニークネスに引きつけられる。膨大な古典籍や史料に取り組み、中世・近世教育史に関する圧倒的成果を残した碩学というイメージとは異なる相貌が浮かび上がってくる。意外なことに、戦前・戦後の同時代の教育史研究の本流から距離を置いたところで独自性を追究していたという側面が強い。それ故に、戦中・戦後を通して時代状況に迎合することの無い学問的立場を一貫し得たともいえる。

さらに、石川は海外の研究者との学問的交流にも積極的であった。たとえば、『江戸時代の教育』（原題：Education in Tokugawa Japan, 1970）で知られるR.P. ドーアや『日本近代化と教育』（原題：Society and Education in Japan, 1969）で知られるH. パッシンは、石川の後押しを受けてそれぞれの研究の基盤を固め、そこにイギリス人やアメリカ人ならではの独自性を盛り込んだ。とりわけ近世社会における

日本人の識字率の高さを、そしてそれを支えた教育的達成の高さが後の近代化の成功を導く要因となったと強調した。こうした主張は批判も受けたが、歴史学、民族学、社会学などの諸分野に根強く浸透し、教育史とりわけ日本教育史研究の世界にも強いインパクトを与えたといつてよい。「近代化と教育」は80年代に至るまで、主要なテーマとして扱われることが多く、その後も「近世と近代との連続・非連続」が問題とされる傾向も強い。

こうしたなかでいち早くドーアやパッシンに触発されたのが石川であった。会津藩の事例に注目して『近世教育における近代化的傾向』（1966年）を発表し、彼らの主張に呼応しているが、同時に事実から分析しようとし、理念からアプローチするドーアやパッシンとの違いを際立たせようとしている。かつて、教育史学会創設時の理念を意識し、海外の研究者との間に単なる伝達とか受容というレベルを越えた交流が成立していたことを、あらためて想起するべきであろう。ここでは、イギリス人・アメリカ人・日本人としての個々の独自性を保ちつつ、日本近世の教育について異なる角度からアプローチし、相互にインスパイアする関係が生じていたといえる。

今回のシンポジウムは、教育史研究の深化と学際化・複合化との併立を求めようとする教育史学会創設時の理念を意識しつつ、新たな知の遊歴のための船出に必要な試みは何かという問いから発している。20世紀末からグローバル化への波が一挙に押し寄せてきたが、日常の生活レベルでも世界との距離が急速に縮まりつつある現実を意識せざるを得ないし、またそれ故の困難さも実感する現代社会である。このような背景には、国家間の関係性も大きく変わり

つつあり、主権国家の存立基盤に疑いさえも生じている状況がある。大きな変動期が迫りくる可能性が高い現代、固定化されたかのように見える枠組みを乗り越えて、新たな新天地への船出を意識した教育史研究のあり方について議論し、新たな教育史像を具現化するための道筋を求めたい。教育史学会においては「永遠の課題」と目されることもあるが、そのとば口において、日本の教育史学を切開き、教育史学会草創期にこの課題について研究者としてのあり方を示した石川謙の足跡を振り返ることから始めることにしたい。

報告者のうち、リチャード・ルビンジャー教授と韓龍震教授は、本学会の海外特別会員であり、お二人とも日本への留学経験も豊富で日本語が堪能であることから、報告・質疑は日本語で行う予定です。また、このシンポジウムは横浜国立大学との共催であり、広く一般市民にも公開されます。

さらに、本学附属図書館所蔵の教育文化コレクションを資料展示する企画を暖めています。石川謙所縁の「謙堂文庫コレクション」と「府川コレクション」の一部を公開し、近世から近代への移行期の教育の変容過程を認識していただければと存じます。

大会に関する情報をホームページにおいて随時お知らせいたします。学会のホームページにもリンクいたします。

多数の皆様のご参加を準備委員会委員一同心からお待ちしております。

第60回大会準備委員会委員長
大戸 安弘

機関誌編集委員会からの報告

機関誌編集委員会委員長 川村 肇

5月15日に上智大学で開催された第3回機関誌編集委員会で、『日本の教育史学』第59集に掲載する研究論文と著者を下記のとおり決定しました。掲載される論文は、日本6本、東洋1本、西洋1本、複数領域1本、合計9本です（なお並びは掲載順です）。

【日本】

- ・小野雅章 戦前日本における「国旗」制式統一過程と国定教科書—文部省による制式決定（1940年）迄の経緯—
- ・塚原健太 東京女子高等師範学校附属小学校における「作業科」の特質
- ・須田将司 日中戦争期における「学校常会」論の広がり—培地となった「国民訓育連盟」と「日本青年教師団」—
- ・徳山倫子 1930年代の公立職業学校における女子教育—大阪府立佐野高等実践女学校を中心に—
- ・池田裕子 樺太庁拓殖学校の再編
- ・鳥居和代 戦後の神戸市における方面教育と訪問教師制度の展開—子どもの長期欠席・不就学問題への取り組みに焦点を当てて—

【東洋】

- ・張語涵 1920年代中国におけるキリスト教主義の女子教育と結婚問題—韓端慈女史の死に関わる報道をめぐって—

【西洋】

- ・井岡瑞日 20世紀フランスにおける絵本と子育て—1930年代のペール・カストール絵本を中心に—

【複数領域】

- ・山本和行 芝山巖の「神社」化—台湾教育会による整備事業を中心に—

今回は投稿が33本（日本22本、東洋2本、西洋6本、複合領域3本）でしたが、文字数等の超過により3本、題目変更の不適切により1本、合計4本（日本2本、西洋2本）を不受理としました。

第一段階審査での指摘事項には次のようなことがありますので、今後投稿される場合に、ぜひ参考にしてください。

(1) 形式的な面に関する指摘

誤字や脱字が目立つ。完成原稿としての提出を求めているので、提出後の修正は原則としてできないものと考えて細心の注意を払ってください。

(2) 内容的な面に関する指摘

- ①テーマ設定やテーマの意義づけがあいまい、あるいはテーマにかかわるキーワードの説明が不十分で、そのために何を論証しようとしたのかがわかりにくい。
- ②先行研究の取り上げ方が不十分である。
- ③論証の結果が先行研究によって形作られている通説的理解に何を加え、何を変えたのかの説明が不十分である。

第二段階審査では、「論文審査手続」に基づき、編集委員が10点満点・10段階の評点を付け、各論文の平均点によって採択の可否を決定しました。今回の全論文の平均点は5.16点でした。

* 図書

- ・永井優美 『近代日本保育者養成史の研究—キリスト教系保姆養成機関を中心に—』 風間書房 2016/2/15
- ・奥平康熙 『「山びこ学校」のゆくえ 戦後日本の教育思想を見直す』 学術出版会 2016/2/10
- ・渡邊隆信 『ドイツ自由学校共同体の研究—オーデンヴァルト校の日常生活史—』 風間書房 2016/2/25
- ・藤森智子 『日本統治下台湾の「国語」普及運動—国語講習所の成立とその影響』 慶應義塾大学出版会 2016/2/25
- ・小林千枝子・平岡さつき・中内敏夫 『到達度評価入門 子どもの思考を深める教育方法の開拓へ』 昭和堂 2016/3/15
- ・江利川春雄 『英語と日本軍 知られざる外国語教育史』 NHK出版 2016/3/25
- ・川村肇・荒井明夫編 『就学告諭と近代教育の形成 勸奨の論理と学校創設』 東京大学出版会 2016/2/29
- ・田嶋一 『〈少年〉と〈青年〉の近代日本 人間形成と教育の社会史』 東京大学出版会 2016/3/18
- ・奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター編 『奈良女子高等師範学校とアジアの留学生』 敬文舎 2016/3/24
- ・下司晶・須川公央・関根宏朗編著 『教員養成を問いなおす 制度・実践・思想』 東洋館出版社 2016/3/31
- ・江島顕一 『日本道德教育の歴史—近代から現代まで』 ミネルヴァ書房 2016/4/15

* 紀要・ニューズレターなど

- ・『教育社会史史料研究』第9号 教育社会史史料研究会 2015/7/30
- ・『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第62巻第1号 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 2015/9/30
- ・『筑波大学教育学系論集』第40巻第1号 筑波大学人間系教育学領域 2015/10/1
- ・『ディルタイ研究』第26号 日本ディルタイ協会 2015/11/30
- ・『大学教育学会誌』第37巻第2号 大学教育学会 2015/11/30
- ・『人間と社会の探求 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第80号 慶應義塾大学大学院社会学研究科 2015/12/22
- ・『教育史研究室年報』第21号 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育史研究室 2016/1/1
- ・『仏教教育ニュース』No. 47 日本仏教教育学会 2016/2/1
- ・『大学教育学会ニューズレター』No. 101 大学教育学会 2016/2/5
- ・『立教学院史研究』第13号 立教大学立教学院史資料センター 2016/2/29
- ・戦後70年記念シンポジウム『戦争と中央大学』中央大学「戦争と中央大学プロジェクト」 2016/2/29
- ・『筑波大学教育学系論集』第40巻第2号 筑波大学人間系教育領域 2016/3/1
- ・『武蔵大学人文学会雑誌』第47巻第2号 武蔵大学人文学会 2016/3/15
- ・『中央大学史紀要』第20号 中央大学史料委員会専門委員会 2016/3/20
- ・『教育論叢』第59号 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻 2016/3/31
- ・『名古屋大学大学文書資料室紀要』第24号 名古屋大学大学文書資料室 2016/3/31
- ・『名古屋大学大学文書資料室ニュース』第33号 名古屋大学大学文書資料室 2016/3/31
- ・『武蔵大学人文学会雑誌』第47巻第3・4号 武蔵大学人文学会 2016/3/31
- ・『大学教育学会ニューズレター』No. 102 大学教育学会 2016/4/15

事務局からのお知らせ

1. メールアドレス確認のお願い

教育史学会では、会員に向けた迅速かつ能動的な情報伝達手段として、メールマガジン「教育史学会メールニュース」を創設し、配信を開始しています。

しかしながら、アドレスエラーで配信できない事例が相当数発生しています。とくに、勤務先を変更された際に新しいメールアドレスをお知らせいただけていない場合が多いようです。

「メールニュース」の配信を希望される会員は、事務局までメールアドレスをお知らせくださるようお願いいたします。

2. 「日本の教育史学」J-STAGE 掲載開始のお知らせ

教育史学会では、機関誌「日本の教育史学」のオンライン公開に向け、J-STAGE への掲載を進めてきましたが、このたび準備が整い、2016年5月2日より第58集の公開が開始されました。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/kyouikushigaku/-char/ja/>

今後、機関誌刊行から6ヶ月経過後にJ-STAGEにて公開することとなります。

また、これまでCiNiiにて公開しておりましたバックナンバーは、6月以降、順次J-STAGEへの移行作業が行われることとなります。

CiNiiで公開中のデータは、「書誌詳細画面へのリンクURLは、当面の間はこのままご使用いただけます。」とのことです。

3. 国際教育史学会加盟のお知らせ

教育史学会は、国際教育史学会 (ISCHE:International Standing Conference for the History of Education) への加盟手続きを行い、2016年度より機関会員 (Institutional Member) となりました。

4. 理事選挙について

本年は、3年に一度の理事選挙の年になります。6月から7月にかけて理事選挙を実施します（選出された理事により、代表理事・機関誌編集委員の選挙が行われます）。ご協力をお願いいたします。住所・所属等に変更があった方はすみやかに事務局までお知らせください。

5. 会費納入のお願い

5月15日時点で第59回大会年度会費を納入いただけていない会員には、払込用紙を同封させていただきました。過年度会費に未納がある方には、未納分も合算して請求させていただいております。会費のすみやかな納入にご協力ください。

6. 会員登録について

現在、次の方々住所不明となっています。お心当たりの方がいらっしゃいましたら、事務局までご一報くださるようお願いいたします。なお、会員登録内容の変更は、ご本人からのお申し出によってのみ可能となります。

青山 鉄兵 石原 義久 遠藤華奈子 (敬称略)

2016年5月
学会事務局 八畝 友広

教育史学会 会報 No. 119 2016年5月25日

編集・発行 教育史学会事務局 八鍬友広
〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院教育学研究科
八鍬友広研究室 気付
電話 022 (795) 6117
電子メール mail@kyouikushigakkai.jp
郵便振替口座 00140-0-552760 教育史学会事務局

印刷 城島印刷株式会社